

〈原著論文〉

詩人の花園

——エミリー・ディキンソンのバラ——

松 本 明 美*

The Poet's Flower Garden:
Emily Dickinson's Roses

Akemi Matsumoto

要旨：アメリカの詩人、エミリー・ディキンソンは、生涯をとおしてほとんど父親の屋敷を出ることではなく、庭の花々を育て、家事に勤しみながら、詩作を続けてきた。ディキンソンにとって、庭の花は、心を慰めるものであった。特に、花が一斉に開花する夏の季節は、彼女の心を魅了した。いつも花の成長を楽しみに世話をし、時にはそれを押し花にして保存していた。実際、彼女の詩の中には、「バラ」をはじめ様々な花の名前が出てくる。その「バラ」と言えば、古今東西の作家や詩人たちが好んで用いた花である。その花から立ち上る芳香や花びらの色の多彩さで、多くの見る者たちを魅了する。そしてその立ち姿は、人を寄せ付けない孤高な印象を与える。それゆえ、多くの人たちがこの花の虜になるのである。ディキンソンも同様にこの「バラ」を好んだため、特別な花として彼女の詩作に多く登場する。しかし、ディキンソンは、その客観的な思考と観察力で、彼女独特の「バラ」の詩を創作したのである。その結果、彼女の詩の中の「バラ」は、永久に咲き誇るのである。

Abstract: This paper examines the motif of roses in the poetry of Emily Dickinson, who enjoyed tending to plants and flowers in her garden as well as birds and other small animals. As some of her poems reveal, she was particularly enamored with roses. Roses are attractive flowers; they come in various hues and have a sweet fragrant scent. Dickinson and several other English and American poets, such as Cristina Rossetti and Ralph Waldo Emerson, were drawn to these features. Observing the local flora and fauna around was a routine of the utmost importance for Dickinson. Although nature is severe harsh, she accepted its order and composed works almost daily. She used original metaphors and idioms during the summer when she was especially enthusiastic. In contrast, she endured numerous difficulties during the winter and longed for spring to return to Amherst. She also preserved a herbarium specimen, which is crucial record for modern-day researchers and readers. This observation reveals her gentle interest in flowers and serves as an inspiration to people today. In conclusion, her love for roses will bloom perpetually through her poems.

Key words : 詩人 the poet バラ roses 夏 summer

はじめに

日本の文芸評論家であった小林秀雄（1902-83）は、「成る程、詩人は言葉で詩を作る。しかし、言うに言われぬものを、どうしたら言葉によって現す事が出来るかと、工夫に工夫を重ねて、これに成功した人を詩人と言う¹⁾」と明快に説明する。今から少し時代を遡れば、本

論で考察するアメリカを代表する詩人のエミリー・ディキンソン（Emily Dickinson, 1830-86）も、辞書を頼りとして、言葉を探し、選び抜いた言葉で生涯に1800編近くもの詩を書き残した。ディキンソンだけではなく、古今東西の詩人たちもまた、画家が色彩にこだわって描いたように、詩の言葉によって、粉骨砕身の努力を重ねて詩を書き上げた。小林の言うように、「詩人」と呼ぶに

受付日 2023. 5. 17 / 掲載決定日 2023. 8. 8

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

値する人たちは、陰で見えない努力を続けてきたのである。

ディキンソンの 55 年の生涯を遠巻きに見れば、彼女の人生は、目の病気などを除けば、さほど大きな荒波をくぐり抜けてきたようには見えないであろう。弁護士の父の家で裕福に暮らし、ごく限られた友人との書簡のやりとり、そして家事に勤しみながら庭の花々や小動物、ニューイングランドの自然を観察する日々。一見、穏やかで静謐な人生に思えるが、彼女の内面は孤独と葛藤の連続でもあった。

ディキンソンがどれほど偉大な詩人であっても、ストイックに詩作の道を邁進するだけでは、行き詰まりや孤独感に苛まれることがあったに相違ない。ディキンソンの場合は、詩作や書簡を書く傍ら、大事にしていたのが、身近な自然と向き合うことであった。ディキンソンの詩のテーマには、鳥や蜜蜂や蝶、それに花がよく取り上げられている。花の中でも、とりわけ多く目に付くのが「バラ」である。この「バラ」については、色鮮やかな赤い花びらをイメージするほどによく知られた品種である。しかしながら、バラの品種は数多く、木立ち性のバラ、つる性のバラ（フェンスや壁に添うもの）などがあり、その名前や花びらの色も実に多彩である。しかし、「バラ」には棘があり、害虫に弱いなど、繊細な植物のため栽培が容易ではない。その栽培には手間がかかる分、開花した時の美しさに心が奪われる。また、美しい「バラ」には棘がある、という性質が、どこか魅惑的な印象をかき立てている。それはヴェルヴェットのような花びらを持ち、その色は高雅で、見る人の目を釘付けにする。眉目秀麗な「バラ」の花から立ちこめる馥郁とした香りも、人々を虜にする。だからこそ、アメリカだけでなく、ヨーロッパ各地でもこの花は、様々なことの象徴となっている。例を挙げれば、イギリスの内乱であった「バラ戦争」(1455-85)である。小説や詩の分野においても、「バラ」は一つのモチーフとして多く登場している。そして、ディキンソンもまた然りである。そこで本稿では、ディキンソンの詩に出てくる「バラ」の花が表す意味も論述する。最後に、この花がディキンソンの詩作に大きく関わっていることも論及する。

I バラを愛する詩人たち

ディキンソン以外にも、「バラ」をテーマにした詩を書いた詩人は多い。例えば、年代の古い詩人から紹介すると、劇作家でもあるウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) は、彼の『ソネット集』の 1 番の中に、“beauty’s rose might never die” というフレーズが見られるし、同 54 番では、“The rose

looks fair, but fairer we it deem / For that sweet odour which doth in it live” と語られ、花の香しさがそなわっているからこそ、もっと美しいのだと述べられている。ロバート・ヘリック (Robert Herrick, 1591-1674) の “To the Virgins, to Make Much of Time” というタイトルの詩の冒頭に書かれた、“Gather ye rosebuds while ye may,” は、特に有名である。そして、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) には、“The Sick Rose” という陰鬱な短い詩がある。さらに、ロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-96) の詩、“A Red Red Rose” では、「恋人」の若さや美しさを深紅の「バラ」に例えている。また、ディキンソンと同じ年に生まれたクリスティナ・ロセッティ (Christina Rossetti, 1830-94) は、同時代の詩人たちに比べて、「バラ」の花を描写した詩を多く書き残したと言われている²⁾。ディキンソンの詩作にも影響を与えた、アメリカの詩人で思想家のラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) は、彼の詩、“The Rhodora” の中で、「シャクナゲ」を「バラのライバル」と見なしている。このように「バラ」は、様々な詩人たちが取り上げている花であることが分かる。先ほど述べたロバート・ヘリックやロバート・バーンズは、「バラ」の咲き誇るような開花を女性の若さやその時の美しさに例えている。従来では、「バラ」の花は、「花の王」と称され、その香しさから「若さ、美、魅力、喜び、無垢」などを象徴するという³⁾。つまり、その花は、うら若い女性の美や純真さを象徴するのである。一方で、本来の「バラ」が美しく咲く期間は短く、すぐに枯れてしまう。同様に、女性の美貌も永続するとは限らないという考え方もある。昔の詩人たちのイメージでは、女性にとって青春を謳歌する若き頃こそが人生の華であり、それを過ぎれば外見も枯れていくという考え方があった。それゆえに、「バラ」は女性の一生に例えるのにもっとも適した隠喩であった。これはディキンソンのような女性詩人や、現代のジェンダー的視点とは逸脱したものだらう。

では、ディキンソンの「バラ」はどういう花だらうか。まず、次の詩を見ていきたい。

Nobody knows this little Rose—
It might be a pilgrim be
Did I not take it from the ways
And lift it up to thee.
Only a Bee will miss it—
Only a Butterfly,
Hastening from her journey—
On it’s breast to lie—

Only a Bird will wonder—
 Only a breeze will sigh—
 Ah Little Rose-how easy
 For such as thee to die! (F11B)⁴⁾

この詩から、小さくかわいい「バラ」の花に目を向けるディキンソンの姿を想像することができる。「バラ」に気を留めて慈しむのは、人間ではなく、「バラ」の花びらに止まる「蜜蜂」や「蝶」の方である。そして、詩の後半では、「小鳥」と「そよ風」が、「バラ」がないのを落胆し、「ため息をつく」。「バラ」はいつまでも花を咲かせることはない。それはいずれしぼんで枯れてしまう。自然界に属する小動物たちは、その変化に敏感である。最後の2行には、この「バラ」が儚くしぼんでしまい、嘆き悲しむディキンソンの無念さが表れている。先ほどの、「バラ」は、「若さ、美、魅力」の象徴であるということを読み起こすとすれば、この花の栄華はごく短い期間しかないことが分かる。特に最後の2行には、ディキンソンの無念さや憐れみが込められている。

次の詩も、先ほどの詩と同様にディキンソンがとても若かりし時に書いた詩である。また、彼女の青春を彷彿とさせる、若く澁澁とした作品としても知られている。

A sepal-petal-and a thorn
 Opon a common summer's morn—
 A flask of Dew-A Bee or two—
 A Breeze-a'caper in the trees—
 And I'm a Rose! (F25)

1858年に書かれたこの詩は、ディキンソンがまだ10代の時のものである。やや唐突ながら、「一つの萼片、花びら、そして棘」と「バラ」のそれぞれのパーツが示される。「棘」という言葉から、「バラ」の花の茎を連想することができる。そして、科学の実験で使われる道具、「フラスコ」には眩しい夏の朝の「露」が溜まっている。さらに言えば、この「フラスコ」は、物質を蒸留する際にも使われる。

11番の詩にも出てきた、「蜜蜂」の存在が、「バラ」に吸い寄せられる生き物として登場する。また、「そよ風」によって、花びらが揺れ動く様子も想起させる。最終行には、「そして私はバラの花」と大胆な告白が見られる。この一文については、友人のアバイア・ルートに宛てた書簡の中で、「私は本当に急に美しくなっています！私が17歳になった時には、アマーストの美女（“the belle of Amherst”）になるでしょう⁵⁾」という内容を思い起こす。ディキンソンがまだ10代の頃の、率直

で自信にあふれた言葉遣いで締めくくられている。ディキンソンが、いつか「バラ」のように周囲の目を引き付ける存在になると確信していた様子が伺える。「バラ」の花は、ディキンソンにとって、堂々として姿形が美しい、そして神秘的な存在感を纏う花なのである。

次の111番の詩も自信にあふれたディキンソンの様子が分かる詩である。

Artists wrestled here!
 Lo, a tint Cashmere!
 Lo, a Rose!
 Student of the Year!
 For the Easel here
 Say Repose! (F111)

「バラ」は、「芸術家たち」にとって、近寄りがたい神聖な花であることが分かる。この冒頭の“Artists”が、将来の詩人としての萌芽も暗示されている。5行目に「画架」とあることから、ここで苦悩するのは画家であることが分かる。どのようなモチーフの絵画かは明らかにされていないが、「カシミール」や「バラ」があることから、どこかエキゾチックな印象がある。細かな織物の柄や「バラ」の花びらの微細な色合いを描ききることが、熟達した画家でさえ不可能なことが想像できる。このように画家は、この花の前では絵筆で簡単に再現することが困難となるのである。

この章では、ディキンソンが若い頃に創作した「バラ」をモチーフにした詩に焦点を当てることで、その植物が持つ高貴な品性と、周囲を寄せ付けないようなオーラや、その際立つ存在感をテーマにした詩を考察した。また、若きディキンソンが、「バラ」のようになることを夢見るかのような詩もあった。しかし、従来の詩人たちと視点が異なるのは、自分こそが「バラ」であり、この若さが永久に続いていくかのように信じている幼さも見られ、若さゆえの自信も伺わせる。次の章では、ディキンソンが詩人として成熟していく過程で、「バラ」がどのように詩作の中で関わっていくのかを、考察していく。

II 夏とバラ

ディキンソンの533番 (I reckon-When I count at all-)の詩の中にあるように、語り手の「私」にとって重要な項目を挙げた「リスト」のいちばん初めには、「詩人たち」の他に「夏」も含まれている。この「夏」をテーマにした詩は、数多く残されている。そのことはディキンソンにとって、「夏」がいかに大切な季節であることが

首肯できる。この章では、まず「夏」と「バラ」の関係性が見られる詩を考察する。最初に取り上げる詩は、ディキンソンが「ついに夏がやってくるでしょう」と、その季節の到来を待ち望んでいたことを伝えている。

It will be Summer-eventually.
Ladies-with parasols—
Sauntering Gentleman-with Canes—
And little Girls-with Dolls—

Will tint the pallid landscape—
As 'twere a bright Boquet—
Tho' drifted deep, in Parian—
The Village lies-today—

The Lilacs-bending many a year—
Will sway with purple load—
The Bees-will not despise the tune—
Their Forefathers-have hummed—

The Wild Rose-redden in the Bog—
The Aster-on the Hill
Her everlasting fashion-set—
And Covenant Gentians-frill—

Till Summer folds her miracle—
As Women-do-their Gown—
Or Priests-adjust the Symbols—
When Sacrament-is done- (F374)

ここでは、「夏」から秋への移り変わりが、色彩感覚豊かに表現されている。最初の行からすでに、ディキンソンの好きな季節の「夏」という言葉が見られる。第 1 スタンザでは、「パラソルを持つご婦人たち」、「ステッキを使って散歩する紳士たち」、「お人形を抱く女の子たち」が続々と登場する。これらの人たちは、「夏」の陽光の下でそれぞれに生活を営む様子を示している。ついに、冬から春になり、寂しい「風景を染める」かのように光が差し込む。あたかも、1 枚の絵になるような、卓越した表現である。

第 3 スタンザでは、「ライラック」の花が開花する。その「紫色」の花びらが、そよ風で揺れる様子が目に浮かぶ。そして、この詩でも「蜜蜂」がうなり声を立てながら近づいてくる。第 4 スタンザでは、「野バラ」が「沼」中を赤く染めている。キク科の一つである「アスター」が、「永遠の服」を身につける。次に、秋口に咲

く「リンドウ」の様子が、洋服の「フリル」を纏ったようだと言われる。このスタンザにおいても、ディキンソンの花々への観察力が際立っている。

最後のスタンザで、色とりどりの風景を作った「夏」が、惜しまれつつ過ぎ去っていく様子が暗示される。第 1 スタンザで風景に溶け込んでいた人たちや、幾つかの花々が謳歌した「夏」は、静かに立ち去ろうとしている。煌めく「夏」という季節が、「奇跡」という言葉に凝縮されている。その様子が、「女性たちがガウンを片付けるように」という直喩で語られている。そして「夏」が終わる寂しさとともに、最後の 2 行では「牧師」が登場することによって、より神秘的な雰囲気醸し出して詩全体を引き締めている。

このように、この詩全体を改めて読み返すと、「夏」の盛りに咲き誇る「野バラ」が、その華やかさで見入る人を魅了することが分かる。各季節を代表する花々を取り込むことで、季節の移り変わりを冷静に表現している。特に、ディキンソンにとって、「野バラ」は夏に最もふさわしい花であり、花々が色鮮やかに咲く「夏」は、まさに「奇跡」であり、天国のようなものである。

次の詩も、アンソロジーによく採用される詩の一つである。ディキンソンの詩人としての意思表示の詩と言える。同時に、「バラ」と「リンドウ」という見た目の華やかさに差がある花を対比させることによって、「バラ」の存在感が際立つことになる。

God made a little Gentian—
It tried-to be a Rose—
And failed-and all the Summer laughed—
But just before the Snows

There rose a Purple Creature—
That ravished all the Hill—
And Summer hid her Forehead—
And Mockery-was still—

The Frosts were her condition—
The Tyrian would not come
Until the North-invoke it—
Creator-Shall I-bloom? (F520)

この詩に出ている花は、初秋に咲く「リンドウ」である。「リンドウ」は紫色の鐘のような花びらを咲かせることが特徴である。しかし、2 行目の擬人化された「リンドウ」は、「バラになろうとした」が「失敗した」となっている。そのため、「夏」がいっせいに「笑った」

のである。「夏」が夏の花として認めているのは、「バラ」だからである。374番で考察したように、光眩しい「夏」に似合うのは、まさに「バラ」なのである。「リンドウ」は、「バラ」に負けまいと対抗心を抱くが、「夏」はけんもほろろに一笑に付すばかりである。ところが、季節が進んで「雪」が降る季節になると、「リンドウ」は「紫色」の花を咲かせ、「丘中をうっとりさせた」のである。「リンドウ」は「夏」よりも、「雪」に映える花なのである。すると、「夏」が「額」を隠して、「嘲りも止んだ」のである。「リンドウ」が一番美しく花を咲かせる頃は、気温が低下して「霜」が降りるような季節である。つまり、「バラ」のように「夏」に堂々と花開かせるよりも、「リンドウ」は寒さが増す季節の方が似合うのである。ディキンソンは、「リンドウ」の「紫色」を、「ティリアンパープル」という青紫色の染料に例えている。「リンドウ」には「リンドウ」にふさわしい季節があり、その美しさがある。それは、アマーストの厳しい秋冬に抗うほどの芯の強さがある。その強さは、ディキンソンの心に強さと勇気を与えた。最後に語り手の「私」は、「主」に対して呼びかける。私も「リンドウ」のように凜とした佇まいで花咲かせられるのかと。たとえ「夏」の「バラ」には程遠くても、外観が地味でも、いつか周囲が振り向くような「リンドウ」のようにもなりたいと、ディキンソンは思ったのだろう。あるいはディキンソンが、自分が今は「リンドウ」のように目立たない存在だと自認しつつも、「バラ」の花に憧れ、そのような立ち姿に相応しい詩人を目指していたことを、この詩は表現している。

最終行の“Creator”に注目すると、「創造主」としての「主」(God)からは、ディキンソンが詩人として、逆境や困難に立ち向かう決意が伺える。ディキンソンが生きた19世紀のアメリカでは、女性が詩人として認められることがなかったことが要因の一つだろう。だからこそ、この「リンドウ」に生きる勇気をもたらすことが首肯できる。

Ⅲ 言葉のバラ

この章では、円熟期にさしかかったディキンソンが、詩作をする上で「バラ」が重要な植物のモチーフであることを再確認する。そのためにこの章で引用する詩は、ディキンソンが晩年に書いた詩も含む。

1875年、彼女が45歳の頃に書いた次の詩を読む。

Winter is good-his Hoar Delights
 Italic flavor yield—
 To Intellects inebriate

With Summer, or the World—

Generic as a Quarry
 And hearty-as a Rose—
 Invited with asperity
 But Welcome when he goes. (F1374)

「夏」の季節をいちばん好んでいるディキンソンではあるが、「冬」の詩も何編か書いている。ここでは、冒頭で「冬」には「冬」の「喜び」があることが強調されている。そして、“Italic”は、「イタリック体」または「古代イタリア風の」という意味を持ち、文字に関係する言葉である。次のスタンザでは、「石切場」という冷たい触覚を想起する言葉がある。しかし、「冬」でも「バラ」のように「心が温まる」とある。「冬」の白い世界に、深紅の「バラ」の色が際立っている。最後の2行では、「冬」に対する考え方が歴然とする。「荒々しく招かれる」ものの、「冬」の季節が終わりを迎えると、「歓迎される」のである。そして、とうとうアマーストの人たちが待ちわびる春と夏の季節へ巡っていく。この詩でも、「バラ」はディキンソンにとって、「夏」を象徴する花であり、「知性」を持つ。これは、詩人にとっても必須の資質だろう。

次に1374番の詩と内容的に似たものとして、1480番の詩を取り上げる。

A little Snow was here and there
 Disseminated in the Hair—
 Since she and I had met and played
 Decade had hastened to Decade—
 But Time had added, not obtained
 Impregnable the Rose
 For summer too indelible—
 Too obdurate-for Snows— (F1480)

「小雪が／あちこちの髪に降りかかっていた」で始まるこの詩は、積もるのは雪だけではなく、「10年」がさらに「10年」へと年月が経過していく様子が語られている。このように「時」が積み重ねていっても、「難攻不落のバラ」は手にすることはできない。季節が巡っても、至高の「バラ」は超然としていて、摘み取られることはない。「夏」が過ぎてもまた「冬」が巡っても、「バラ」は泰然自若としている。植物の「バラ」というより、ディキンソンの心の「バラ」であり、決して揺らぐことのない心の支えなのである。

一般的に、「バラ」は「夏」に咲く花ではあるが、厳しい「冬」が来ても、詩の中に咲く「バラ」は誰にも摘まれることなくそこに存在している。1374 番と 1480 番の詩は、ディキンソンが 40 代後半に書いた詩であるため、若い頃に書いた詩に比べて、「バラ」に対する厳粛な敬意と崇拝の念が込められている。ディキンソンは「バラ」を、「夏」を代表する花だけではなく、1 年を通して咲き続ける心の花とみなしていた。その凛とした高貴な佇まいは、ディキンソンが詩人として生きる上で模範とするものであった。

ディキンソンが一輪の「バラ」を慈しむ他の詩人たちと同じように、詩人として創作を続けることも大切にしていた。詩人が育てた詩の「バラ」は、読者にとってどのようなメッセージを伝えるのか。次の 176 番が、その手掛かりとなるだろう。

If I could bribe them by a Rose
I'd bring them every flower that grows
From Amherst to Cashmere!
I would not stop for night, or storm—
Or frost, or death, or anyone—
My business were so dear!

If they w'd linger for a Bird
My Tamborin were soonest heard
Among the April Woods!
Unworned, all the summer long,
Only to break in wilder song
When Winter shook the boughs!

What if they hear me!
Who shall say
That such an importunity
May not at last avail?
That, weary of this Beggar's face—
They may not finally say, Yes—
To drive her from the Hall? (F176)

この詩の冒頭に、「1 輪のバラ」によって、「bribe」「賄賂を贈る」という不可思議な動詞が見られる。言い換えれば、「バラ」が人の心を変えるほどの不可思議な力を持つものなら、「私」は「アマーストからカシミール」までに咲く「バラ」を抱えきれないくらい摘み取って、持って行くだろうと明言している。当然ながら「アマースト」はディキンソンの住む町であるため、遠回しには自宅の庭の「バラ」を指す。そこから遠いインドの「カシ

ミール」地方までの「バラ」も、たくさん摘み取っていくと強調している。語り手の「私」は、「夜」でも、「嵐」でも、「霜」でも、誰かの「死」に遭遇しても、「私の仕事」の方が大事であり、手を休めるわけにはいかないのである。この「私の仕事」(“My business”)について語っているスタンザからは、「詩の創作過程それ自体を主題とするメタポエム、詩論」⁶⁾が読み取れると言う。この論述に従えば、「1 輪のバラ」は、読む人の心を揺さぶる詩を表す隠喩と見なすことも可能である。「私」にとってどのような厳しい状況にあっても、詩人である以上は、詩を書くという大切な「仕事」を止めることはできないのである。それぞれの詩人と称する人たちの心の中には、揺るぎない一輪の「バラ」がしっかりと根付いている。

第 2 スタンザでは、「1 羽の鳥」がいなくても、「私のタンバリン」を鳴らして、「4 月の森」中を響かせるとなっている。「夏の間中」に「タンバリン」を鳴らせ、「冬」には「夏」ほどでなくても控えめにその楽器を鳴らし続ける。季節を問わず、演奏を続けて、人々の心の琴線に触れるようなメロディー、すなわち詩を書くのである。

第 3 スタンザでは、一転して、語り手の不安が錯綜している。最後の行が特に痛切である。用がないからと叱責され、「玄関」から出て行くように言われるかもしれない。しかも、語り手は、「この物乞いの顔」と蔑んだトーンに変容している。この最終スタンザは、幾つかの疑問を提示しながら終結する。

この詩についてさらに踏み込んで考察するなら、「バラ」はディキンソンが慈しんで育てた花、すなわち、珠玉の「詩」であると言える。「詩」を書くことを生涯の仕事と決意したディキンソンにとって、詩作は少々困難なことでも中断できない仕事なのである。第 2 スタンザは、音楽のモチーフに変わっているが、語り手は、「春」も「夏」も、厳しい「冬」でもメロディーを奏でる。そして、最終スタンザでは、時には自分の仕事に誇りを持たず、逡巡している様子が伺える。自分が慈しみ育てた「詩」が、人々の心を捉えるのかどうか、確たることは言い切れず苦悩のままこの詩は終わる。

「詩」とその「創作過程」を提示した詩が、次の 772 番である。まさにディキンソンの詩作のあり方が述べられた秀逸な詩である。

Essential Oils-are wrung—
The Attar from the Rose
Be not expressed by Suns-alone—
It is the gift of Screws—

The General Rose-decay—
But this-in Lady's Drawer
Make Summer-When the Lady lie
In Ceaseless Rosemary— (F772B)

「大切な油」とは、ここでは混じり気のない純度の高い「油」を指している。2行目に、「バラからの油」というフレーズがある。そしてここでは、「バラからの油」がどのような過程を経て純粋な「油」が出来るのかが語られている。それは以外にも、「太陽」を利用した自然乾燥によって出来るのではなく、「ねじの賜物」によって絞り出されるという。綺麗な「バラ」の花びらをむしり取り、「ねじ」のような硬い物質ですり込まれてエキスを絞り出す。「バラ」の花びらを圧縮して絞り出し、不純物のない「油」を抽出する。この蒸留するという作業については、446番の詩で、「普通の意味から／驚くべき感覚を蒸留」できる人こそが、「詩人」だと定義されている⁷⁾。この詩行は、772番の「蒸留」の過程とも合致していると思えることが可能である。

第2スタンザでは、「一般のバラは朽ちる」という植物界の事実が淡々と語られる。花が盛りを過ぎると、萎れて枯れてしまうのは、至極当然の事実である。しかしながら、「これ」すなわち「バラからの油」は、「ご婦人の引き出し」(“Lady's Drawer”)の中で「夏を作る」とある。香油が「ご婦人の引き出し」の中で、それが引き出される度に、「バラ」の芳香が広がり、周囲が「夏」の空気で一変する。そして、その香油が「ご婦人」の嗅覚を刺激して、彼女の脳裏にはあの素晴らしい「夏」の思い出で満たされる。たとえ、「ご婦人」がこの世から去っても、その後も「バラからの油」は、繰り返し「夏」を作り続ける。

この772番は、「メタポエム」の一つと見なすことが可能だろう。先ほど772番の詩に言及したように、詩の言葉を作る過程は、膨大な時間と地道な努力が必要だからである。特に、ディキンソンの特質である圧縮された、必要な言葉だけを選んで詩文を作る過程は、日常的な表現を削ぎ落として、詩文を凝縮させる過程と相似する。また、4行目の“the gift”は、「才能」という意味も持つ。その「才能」に甘んじることなく試行錯誤を重ねた結果、生み出された混じり気ひとつない言葉は、詩人がたとえこの世から姿を消しても、永遠に「夏」を作り続けるのである。それはあたかも、930番(The Poets light but Lamps-)の詩のように、「ランプ」に灯りをもした「詩人」が亡くなった後も、「それぞれの時代」の光の「円周(Circumference)」は拡大されていくという内容にも通じる。

最後に考察する詩は、「ご婦人」と「バラ」の微妙な関係を描いている。

The Bird must sing to earn the Crumb
What merit have the Tune
No Breakfast if it guaranty

The Rose, content may bloom
To gain renown of Lady's Drawer
But if the Lady come
But once a Century, the Rose
Superfluous become— (F928)

第1スタンザで、「小鳥」が「パン屑のために歌わなければならない」と理由が述べられている。しかし、「パン屑」をもらえなければ意味はないという。続く第2スタンザで、先ほどの772番を彷彿とさせるような内容が示されている。つまり、「バラ」と「ご婦人」との関係性である。「ご婦人の筆筒の誉れ」となるために、「バラ」は花びらを摘み取られ、蒸留されて「バラからの油」へと変容する。そして、はるかに長い年数を生き延びる。しかし、「1世紀に1度しか／ご婦人が現れないなら」、「バラ」の存在意義は希薄なものになる。この「ご婦人」は、100年に一度現れる才能の持ち主だと推測できる。その人が詩人であれ、画家であれ、その人たちが残した偉業は永続的なものであろう。

このように、この章では幾つかの詩を元に、「バラ」が詩を表す隠喩、そしてその「バラ」の「油」が詩の言葉を表す隠喩と見なすことができた。引用した詩に出てきた「私」や「ご婦人」は、詩を創作しようとした詩人であると仮定することもできる。しかし、彼ら彼女らの寿命は有限である。「バラからの油」の方が、無限に生き続けることができる。それは、ディキンソンが考えていた詩や言葉の理想の形なのである。ディキンソンは生涯を通じて、特に晩年になるほど「バラ」の花を、そして言葉を愛した。才能と努力の果てに生み出された詩や言葉が、「バラ」の花のように開花して生き続け、後世の悩み多い人々を癒やし、励ましていくことをディキンソンは望んでいた。

おわりに

これまでの考察の中で明らかになったことは、「バラ」の花は、多くの詩人たちを虜にしてきた高貴な花であり、詩作で多用される特別なモチーフということだ。つまり、その花を自分たちの詩に取り入れ、賛美している。ディキンソンも同様に、この花を愛し、大事な花と

して、詩作に取り入れていた。「バラ」はまさに、女王のような存在である。若い頃のディキンソンは、この艶やかな花のようになることを夢見ていた。そして、年齢とともに詩人としての自覚を持ち、冷静な思考を持つようになると、「バラ」を客観的に捉え、詩作に欠かせないモチーフとして重要視し、詩の中に多く使用した。それゆえディキンソンは生涯に渡ってこの花を愛し続けた。夏には庭の「バラ」が咲くのを喜び、そして冬には次の夏に向けて丹念に手入れをしていたのだ。

ディキンソンは詩人として成熟していくにつれて、詩人と詩の役割を意識するようになった。具体的には、自分が生きている時代は自分の作品は認められないことを自認しつつ、やがて自分の詩に将来を託すようになった。なぜなら、「バラ」から絞り出された香油である「大切な油」は、枯渇することはないからである。そしてこれは、輝く季節の思い出を鮮やかに蘇らせる。ディキンソンが作成した「リスト」のトップに掲げた「詩人」こそが、この偉業を可能にする。このようにディキンソンは、自分の詩と言葉に全幅の信頼を寄せていた。その大切な詩と言葉を、詩人が敬愛する花にたとえ、詩人の花園のように慈しんだのである。ディキンソンの「難攻不落」の「バラ」は、それを読む後生の人たちの心の中で鮮やかに咲き誇るのである。

Notes

- 1) 小林秀雄『小林秀雄全作品 21 美を求める心』新潮社、平成 16 年、247-248 頁。
- 2) 藤田晃代「クリスティナ・ロセッティの詩にみるバラの花の描写」『埼玉工業大学 教養紀要 34 号』埼玉工業大学出版会、2017 年 3 月 1 日。
- 3) アト・ド・フリース著、山下主一郎主幹『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984 年、532-534 頁。
- 4) 本稿での詩の引用は、すべてフランクリン版とし、(F 11B) のように括弧内に示す。
- 5) Thomas H. Johnson and Theodora Ward, eds., *The Letters of Emily Dickinson*, by Emily Dickinson (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1958) No.6. この書簡の中で、ディキンソンは、「あなたはすでに植物標本集を

作りましたか？」と尋ねている一文がある。

- 6) 新倉俊一編『私の好きなエミリー・ディキンソンの詩』、東雄一郎「一輪のバラの花で人の心を買えるなら」4 頁、金星堂、2016 年。
- 7) 新倉俊一編『私の好きなエミリー・ディキンソンの詩 2』、松本明美「大切な油は絞り出される」108-117 頁、金星堂、2020 年。

Works Cited

- Eberwein, Jane Donahue, ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport: Greenwood P, 1998.
- Ferguson, Margaret. Mary Jo Salter and Jon Stallworthy, eds. *The Norton Anthology of Poetry*. Fifth Edition. New York: W. W. Norton & Company, 2005.
- Franklin, R. W., ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1998.
- Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, eds. *The Letters of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1958.
- McDowell, Marta. *Emily Dickinson's Gardening Life: The Plants & Places That Inspired the Iconic Poet*. Oregon: Timber P, 2019.
- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974.
- Vendler, Helen. *Dickinson: Selected Poems and Commentaries*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 2010.
- アト・ド・フリース著、山下主一郎主幹『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984 年。
- 小林秀雄『小林秀雄全作品 21 美を求める心』新潮社、平成 16 年。
- 新倉俊一編『私の好きなエミリー・ディキンソンの詩』、金星堂、2016 年。
- 新倉俊一編『私の好きなエミリー・ディキンソンの詩 2』、金星堂、2020 年。
- 新倉俊一 監訳、東雄一郎、小泉由美子、江田考臣、朝比奈緑 訳、『完訳エミリー・ディキンソン詩集 (フランクリン版)』金星堂、2019 年。
- 藤田晃代「クリスティナ・ロセッティの詩にみるバラの花の描写」『埼玉工業大学教養紀要 34 号』埼玉工業大学出版会、2017 年 3 月 1 日。